

様式 1

研究報告書（平成 26 年度）

提出者 菅原 祥

提出年月日 平成 27 年 3 月 29 日

**【本ユニットにおける研究テーマ】**

和文 東欧の社会主義的近代化と東アジアの近代化における都市の比較研究

英文

**【研究のねらいと目的】**（600 字程度）

本ユニットでは、私がこれまで行なってきた東ヨーロッパの社会主義・ポスト社会主義に関する研究を今後も継続すると同時に、その射程をより広い社会学的テーマへと接続しつつ、特にアジア地域との比較研究をこれまで以上に意欲的に行なっていくのを目的としてきた。具体的には、これまで私が行ってきたような社会主義的近代化における都市経験やその記憶に関する研究を、単に中国・ベトナムといった旧社会主義圏にとどまらず、「圧縮された近代化」ともいえる急速な近代化を経験してきたアジア地域全般における都市の変容やそこにおける経験・記憶のありかたと比較する試みを行う予定であった。また、東欧の社会主義体制とアジアの「圧縮された近代化」の両者に共通するモダニティ体験やそれに関わる記憶を掘り起し、比較研究することで、より広い視点から 20 世紀の近代化・産業化とその記憶のあり方についてより深く考えることを目指した。

**【研究業績】** 学会報告・論文など

（学会報告）「ポスト社会主義都市における共同性の再生の試み——ポーランド、ノヴァ・フータ地区の事例から」（ポスター発表）、日本社会学会第 87 回大会（神戸大学）、2014 年 11 月

（論文）「労働英雄を思い出すということ——アンジェイ・ワイダ監督『大理石の男』を中心に」『スラヴ学論集』第 18 号、2015 年 3 月

（書評）「高橋和・中村唯史・山崎彰編『映像の中の冷戦後世界—ロシア・ドイツ・東欧研究とフィルム・アーカイブ』（山形大学出版会、2013 年）」『東欧史研究』2015 年 3 月（掲載予定）

**【成果の概要】**（800 字程度）

本年の主要な業績としては、まず『スラヴ学論集』に投稿した査読論文「労働英雄を思い出すということ——アンジェイ・ワイダ監督『大理石の男』を中心に」が挙げられる。この論文は、社会主義ポーランドの「労働英雄」に関する記憶とその現代的意義を、アンジェイ・ワイダ監督「大理石の男」という映画を導きの意図として論じたものであり、論文中では直接アジアについては触れていないが、今後「労働英雄」に関して類似の経験・記憶を持っているアジアの（旧）社会主義圏の文化と比較すればさらなる研究の進展が期待できると思われる。

学会報告としては、日本社会学会にてポスター発表「ポスト社会主義都市における共同性の再生の試み——ポーランド、ノヴァ・フータ地区の事例から」を行った。これは、ポーランドの社会主義時代に建設された郊外集合住宅を事例として、そこにおけるコミュニティ再生の試みを特に場所に根ざした社会主義的近代化の「記憶」という観点から論じたもので、やはりアジアに関する直接的な言及は行えなかったが、今後の研究の進展によって日本やアジアにおけるニュータウン等の町おこし、地域おこしに対しても新たな視点から貢献ができるのではないかと考えている。

全体として、本年はアジアと東欧の比較調査という当初掲げた目標は必ずしも成果としては結実しなかったが、上記 2 つの業績のように、その目標へ至るための準備的・予備的課題から研究成果を上げることができたと考えている。

**【通信欄】**